

# 藤枝市と周辺の中世城郭概要と分布

6月議会「一般質問」配布資料（作成者）：平井 登 平成28年7月6日

## □山西の城郭概要（駿河国西部＝益頭郡・志太郡）

益頭郡・志太郡地域は国府がある安倍郡からすれば西隣になり、高草山とそれに連なる山並みを越えた地域にあたることから中世「山西」と呼ばれ史料上に散見される。当地域には、11世紀後半から益頭荘・葉梨荘・大津御厨・岡部御厨・小楊津御厨などの荘園や御厨が成立し、その開発と管理を担った郡司・荘官やその子孫が土着し武士化していた。そうした中に、藤原南家の流れをくむ岡部氏・朝比奈氏がいる。両氏は、源頼朝の御家人として鎌倉幕府成立に貢献し、益頭荘の北部を朝比奈氏が、南部を岡部氏が本領としていた。

平安末期、当地域は平氏の支配が浸透していたが、約6年にわたって続いた治承・寿永の乱(源平合戦)直後の文治元年(1185)以降は、執権北条氏が駿河守護を世襲した。この鎌倉期に創築された城館として、岡部氏館(藤枝市)が伝えられるが後世の水田開発により、土塁の極一部を残して消滅しており、また、同氏の本城といわれる朝日山城についても、縄張り構造が不明確で考古学的調査もされておらず実態は不明である。一方、近接した潮城は藤枝バイパス工事により主要部を消失したが、発掘調査の結果、朝日山城よりも明確な城郭構造であったことを解析しており、貴重な資料となっている。

南北朝期になると今川氏の進出がみられ、足利氏一族の今川範国は鎌倉幕府が打倒され建武政権が樹立すると、遠江国守護に任ぜられた。建武4年(1337)には、美濃国青野原合戦の勲功として駿河国守護を兼ね、葉梨荘を給与されている。観応3年(1352)、範国嫡男範氏は駿河国に勢力を温存する南朝勢力駆逐の命を尊氏から受ける。志太山間地には、南朝方城砦網が張られ、無双連山の主峰に築かれた徳山城(川根本町)を中心に大津城(島田市野田の城山説・藤枝市滝沢城説がある)・宮島の城山(藤枝市)と近年発見された滝沢西城(藤枝市)・青葉根城(藤枝市)・白井砦(藤枝市・島田市)や、大井川中流左岸の塩郷砦(中川根町)などが南朝方の城砦と目される。北朝今川軍は、同年と翌文和2年(1353)にかけて、大津城と徳山城を陥落させ南朝軍掃討を果たすが、山西における軍事拠点の葉梨城(別称:花倉城)と平成19年に発見された葉梨小城(藤枝市)であったことが、両城の類型できる縄張り構造と麓の根小屋(城下集落)形成から推測できる。

応仁の乱(1467～1477)以降、今川義忠と氏親の西進制圧の軍事行動が盛んとなるが、花沢城・小川城・石脇城(いずれも焼津市)・徳一色城(藤枝市)と先述の潮城は、今川氏被官層の手により築城されたと考えられる。

戦国期の天文5年(1536)、今川家の家督争い“花蔵の乱”が起こり、方上城(焼津市)から葉梨城にかけての広域で決戦が展開された。勝者となった正室腹の梅岳承芳(義元)が下した慶寿寺(島田市)への禁制、方上城(焼津市)・葉梨城(花倉城)を攻撃し側室腹の玄広恵探方を敗滅させた岡部親綱への感状、隣国の武田氏・後北条氏の関連文書等々、“花蔵の乱”を伝える文献史料は多いといえるが、乱の核心となる当主・氏輝と次男・彦五郎兄弟の同日死や義元実母・寿桂尼の玄広恵探側への同心など、真相は不明で多くの謎に包まれている。

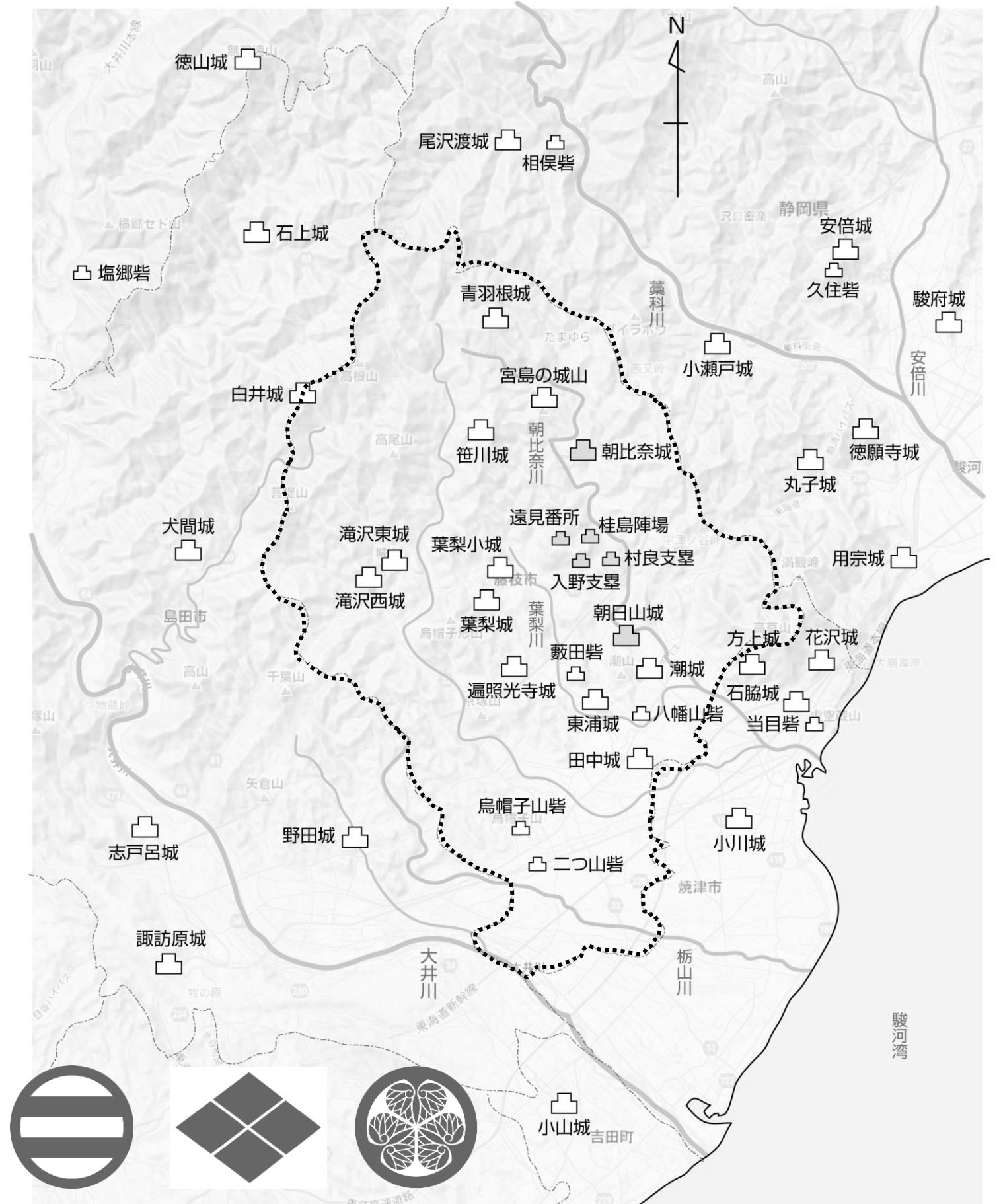
平成19年、静岡古城研究会が葉梨城の東側に対峙する天王山系を悉皆調査した結果、この乱で梅岳承芳方が構えたと推測できる陣城遺構・桂島陣場と付随する遠見番所(『駿河記』、『葉梨村誌』)などの小塁遺構を数カ所発見しており、承芳方の用意周到な計略を裏づける徴証として注目されている。

今川氏を没落させた永禄11年(1568)からの武田氏の駿河侵攻で史料に見えるのが、花沢城・徳一色城(田中城)でいずれも武田氏が攻略している。徳一色城は、武田氏により丸馬出しが増設され田中城と改名して山西制圧の拠点城郭となり、この抗争で反武田の一揆衆が犬間城(島田市)に立て籠り抗戦したりした。また、山間地では、笹間の石上城(島田市)・朝比奈城(藤枝市)などが武田系城郭として改修・運用されたく特徴的な構造を残している。

元龜2年(1571)に始まり天正10年(1582)の武田氏滅亡まで、当地域における武田氏・徳川氏の抗争に関わった城砦は、中核の田中城をはじめ本川根の天王山城(小長井城)・藤枝の東浦城(宅地開発により消滅)・島田の野田城・湯日城、そして著名な諏訪原城などが武田系城郭に加えられる。一方、徳川氏の築いた城砦として、藤枝の八幡山砦・二つ山砦・烏帽子山砦と奪取した島田の牧野城(諏訪原城)・岡田城などがあげられる。

山西の戦国史を象徴する田中城は、武田氏滅亡後、徳川氏が接收したが、天正18年(1590)、徳川氏が関東に転封されると豊臣氏の重臣中村一氏の家臣横田村詮が城代となる。その後、近世の徳川幕府田中藩に引き継がれて行くが、かつて当地域で役割を果たしていた数多の山城はすでに廃城となっていたことは無論である。

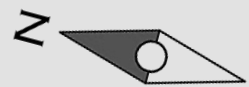
(平井 登)



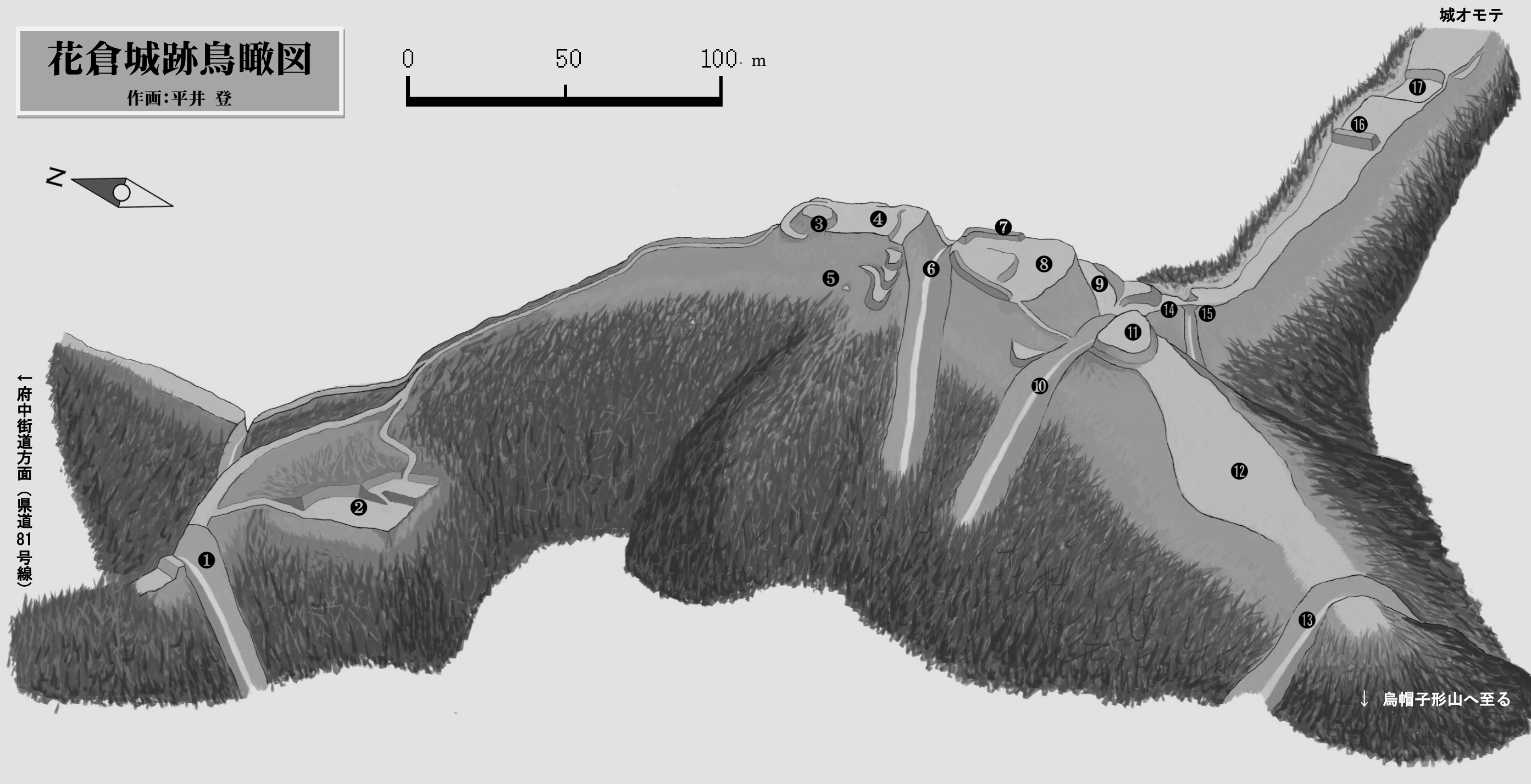
..... 藤枝市域    ——— 海岸線    ——— 河川    - - - - 市境    □ 城    □ 砦

# 花倉城跡鳥瞰図

作画:平井 登



←府中街道方面(県道81号線)



↓ 烏帽子形山へ至る

## ■花倉城跡・主要遺構説明

- ①堀切 A 北北西に位置。尾根を掘り割り敵が城内に侵入するのを阻止する機能。
- ②四の曲輪 堀切 A を監視する機能と、二つの尾根を下って府中街道に進撃する城兵の駐屯曲輪。
- ③櫓台 本曲輪北端に位置し城域全体を監視・合図する櫓(やぐら)の基壇か。
- ④本曲輪 城の主郭(本丸)で、掘っ立て建造物があったと推測できる。
- ⑤井戸 城の水の手で2箇所確認できている。
- ⑥堀切 B 本曲輪(ほんくるわ)と二の曲輪を分断し本曲輪への敵の進撃を阻む。
- ⑦土塁 二の曲輪の周縁部に造られていたと思われるが南側は流失している。
- ⑧二の曲輪 本曲輪より5m程低い位置にあり掘っ立て建造物があったと推測できる。
- ⑨帯曲輪 二の曲輪東側に帯状に付けられた通路を兼ねる腰曲輪のこと。
- ⑩堀切 C 三の曲輪から二の曲輪への侵攻を遮断。堀切 ABD 同様に竖堀機能も有している。

- ⑪土壇 二の曲輪と三の曲輪を木橋で接続するための土台的機能か。
- ⑫三の曲輪 削平されていないが、なだらかな自然地形に城兵を駐屯させる目的。
- ⑬堀切 D 南南西に位置。西の烏帽子形山から唯一延びてくる尾根を遮断。
- ⑭坂虎口 城要所の出入り口で小口(狭い口・狭い道)とも云う。坂状に2条の道筋が残る。
- ⑮土橋・竖堀 坂虎口直前に設けられている。竖堀は斜面を横移動して侵入する敵を阻止するため。
- ⑯土塁 ⑰の土橋方面から進撃してくる敵をここから弓矢で射止めるための構えか。
- ⑰箱堀・土橋 城オモチから襲来する敵を防ぐ防御施設。「花蔵の乱」時の構築と思われる。

●花倉城は、南東尾根が大手筋にあたり、通称「城オモチ」と呼ばれている。その筋の堀切⑮⑰は、土橋が設けられ移動を容易にする導入系であるが、西側の堀切①⑬は城内への侵入を阻む遮断系である。「南北朝期の戦い」「花蔵の乱」等、敵対した向きは時代によって変化していたことが窺える。